



Title	2023 年度 大阪大学地域研究フォーラム（OUFAS）例会における発表要旨
Author(s)	
Citation	アジア太平洋論叢. 2024, 26(1), p. 101-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95113
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2023 年度 大阪大学地域研究フォーラム (OUFAS) 例会における発表要旨

第 172 回

■日時 4 月 27 日 (木) 16:50~

■発表者 Ala Uddin (Professor, Dept. of Anthropology, University of Chittagong)

■発表タイトル “Tales of Survival and Language: Exploring the Impact of Language Barriers on the Lives of Rohingyas and the Role of Language Services in Mitigating the Crisis.”

■要旨 Beginning in the late 1970s, the Rohingya crisis has resulted in the forcible displacement of more than one million Rohingya refugees from Myanmar to Bangladesh. With an unprecedented exodus of approximately 750,000 people, nearly one million Rohingya refugees have been living in overcrowded and under-resourced camps in Cox's Bazar, Bangladesh, since late 2017. The majority of Rohingya refugees do not speak Bengali (though similar to the Chittagong/Cox's Bazar dialect, *Chittagonian*), the official language of Bangladesh, and have a limited ability to speak English. This is one of the greatest obstacles they face. The refugee's access to fundamental services, healthcare, education, and information is significantly impacted by the language barrier. It is undeniable that the similarity between the Rohingya language and the languages spoken by the host communities has made it much easier for Rohingyas to find shelter, provide aid, and interact. If there was no linguistic similarity with the locals, it would have been even more challenging to support these uneducated refugees (who spoke neither English nor any other common language). Nonetheless, the main focus of the piece is the multifaceted depiction of linguistic limitations associated with the Rohingya crisis.

第 173 回

■日時 5 月 11 日 (木) 16:50~

■発表者 菊池泰平 (言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程 3 年)

■発表タイトル 「連合シャン諸州における自治論の形成 (1930-1935 年) -サオ・クンチ著『シャン州の過ち』で描かれた「連邦制」とは何か-」

■要旨 本研究の目的は、1930 年から 35 年の連合シャン諸州 (現在のミャンマー・シャン州) で、現地の領主たちが要請した「連邦制」の議論を再検討することである。タトン藩領主であったサオ・クンチは、ミャンマー連邦制を議論した先駆的な人物として、自治権の拡大を求める人々から評価されている。彼は、1935 年に執筆した小冊子『シャン州の過ち』の中で、ビルマ本土と連合シャン諸州の連携する必要性や、シャンの人民が団結する必要性を訴えたが、これらがどのような文脈で語られたのかは知られていない。本発表では、連合シャン諸州内を治めた領主たちの議論を踏まえて、『シャン州の過ち』が、植民地の枠組みを前提とするシャン自治獲得論への批判であったことを明らかにしたい。

第 174 回

■日時 5 月 18 日 (木) 16:50~

■発表者 松崎準 (人文学研究科外国学専攻 博士前期課程 1 年)

■発表タイトル 「フィリピンのカトリック的な民間信心における教会と民衆の関係性について」

■要旨 現在のフィリピンにおけるキリスト教に関する研究は、制度教会に関する神学的研究と、信心家たちの庶民的な信心(popular devotion)に関する人類学的研究にはっきり分かれている。つまり、民間信心を「正統な」ものに矯正したい「教会」vs それとは関係なく個人的、土着的な信心をもつ「民衆」という構図に別れて研究が行われているのである。前者においては、教会による庶民的な信心の解釈について神学上の議論を発展させてきたが、信心業の実践者からの視点についてはあまり検討されない。また、後者においては、その主体はあくまで信心業を実践する地域の共同体と参加者であり、教会はあくまで周辺的な役割を持つものにすぎない。そこで、本研究は、「教会」と「民衆」を分けて論じるのではなく、両者の接地面を観察することで、両者の関係性を論じていくことを目的とする。

第 175 回

■日時 5 月 25 日 (木) 14:30～

■発表者 岩城考信 (呉工業高等専門学校 建築学分野教員)

■発表タイトル 「イスラームのモスク・集落・墓地から見る多民族都市バンコク」

■要旨 1782 年の以前の遷都以前から、バンコクには様々な出身地のムスリムが交易のために居住してきた。19 世紀以降、より多様な地域のムスリムが職人や商人、農民としてバンコクに流入した。そして、ムスリムの生活拠点として、モスク・集落・墓地によって構成される多くのコミュニティが形成された。本発表では、コミュニティの構成に着目しながら、それらの歴史的な形成過程を考察する。また、20 世紀初頭からバンコクのイスラーム社会において、経済力を背景に強い影響力をもったインド出身のムスリムのコミュニティについて見ていく。

第 176 回

■日時 5 月 25 日 16:50～18:20)

■発表者 陳顔開 (人文学研究科外国学専攻 博士前期課程 1 年)

■発表タイトル 「スハルト体制期の華人表象—中イン両側の考えの異同一—」

■要旨 インドネシアにおいて、スハルトが大統領に就任してから、華人に対して一連の抑圧的な政策を行って、華人を極める窮地に追い込んだ。しかし、実際に華人もインドネシア側にとっての当を得ていない言動があった。それに、同じな華人表象について、両側も態度、注目ポイントの異なりによって考えが全く異なるかも知れない。本研究は中国とインドネシア両国地元の新聞、回想録などを参考資料にして、スハルト体制期の華人表象について、両国の考えを推測する。

第 177 回

■日時 6 月 1 日 (木) 16:50～

■発表者 國眼綾乃 (言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程 1 年)

■発表タイトル 「北部ルソン・イゴロットの直面する現状とアイデンティティについて」

■要旨 フィリピン北部の山岳地帯に住む少数民族は生活や言語や宗教など多様であり、独自の文化が継承されてきたケースが多く見られる。それゆえ外部からの影響を直接的に大きく受けてきた低地に住むフィリピン人たちとは区別され得る存在である。フィリピンで開墾や開発が進められるにつれて、天然資源や土地が豊富にある地域は開発の対象となってきた。しばしばその方法は搾取に近く、こうした地域を居住地とする少数民族の伝統的な価値観を脅かすことに繋がることがあった。彼らのアイデンティティについての研究を進めるための先行研究に関して発表する。

第 178 回

■日時 6 月 8 日 (木) 16:50～

■発表者 中井健太 (人文学研究科外国学専攻 博士前期課程 1 年)

■発表タイトル 「世界史の中のアルタイ・ナショナリズム」

■要旨 1918 年夏、シベリアのゴルノ・アルタイスで「カラコルム・アルタイ管区」が発足し、「オイラト共和国」の建国が模索された。「オイラト共和国」は、現地のアルタイ人やトゥバ人、西モンゴル人を統一した独立国家構想で、かつてのジュンガル (オイラト) 時代の記憶と密接に結びついたものであった。この動きは、ソ連の研究では「反革命ブルジョア民族主義者の分離運動」として語られてきたが、同時期の周辺の民族自立運動との関連・比較の視点から分析することで、世界史の中のナショナリズムのひとつとして位置づけることはできないだろうか。

第 179 回

■日時 6月22日(木) 16:50~

■発表者 金東熙(外国語学部 非常勤講師)

■発表タイトル 「東アジアにおける旅券制度史研究の現況と課題」

■要旨 旅券とは国民という抽象的な概念を物理的に見せる唯一の文書である。すなわち、旅券制度の歴史は国民国家の歴史とその軌を一にする。そのため、「国民」の登場を研究するためには旅券制度の研究が先決しなければならない。しかし、現在、東アジアでは旅券制度の研究はあまり進捗されてない。本発表では今までの旅券研究に関する東アジア、日本、韓国、中国に関する研究を紹介しながら、今後の発表者の関心についても言及する。

第 180 回

■日時 6月29日(木) 16:50~

■発表者 中谷拓也(人文学研究科人文学専攻 博士前期課程1年)

■発表タイトル 「『遺産』文学としての Go Down, Moses と『書くこと』」

■要旨 ウィリアム・フォークナーの Go Down, Moses (邦題:『行け、モーセ』)は、マッキヤスリン一家にまつわる七つの小説を通してアメリカ南部の辿った歴史を描く一大叙事詩と位置づけられている。南部の歴史を検討することは、作品に登場する人物たちによる「歴史」の認識の検分だけにとどまらない。この作品の批評史の言説における「歴史」認識を分析し、さらに作家フォークナーが「歴史を書くこと」にどのように向き合っていたのか、という問いにつながる。本発表では、この作品の紹介として家系図を参照しつつ「遺産」文学としての読みを提示し、さらに作品内の四つ目の小説「熊」(The Bear)内に登場する人物たちの「書くこと」に対する考え方を検討したい。

第 181 回

■日時 7月6日(木) 16:50~

■発表者 呂佳豪(人文学研究科外国学専攻 研究生)

■発表タイトル 「ワ州におけるワ族の国家意識と民族意識のカタチー政治のジレンマと民族的経験について」

第 182 回

■日時 7月13日(木) 16:50~

■発表者 島本昌典(人文学研究科外国学専攻 博士後期課程1年)

■発表タイトル 「慶尚北道達城郡における寿城池の築造についてー在朝日本人水崎林太郎と朝鮮の人々との関係、そして地域の変容」

■要旨 在朝日本人の歴史は1876年の日朝修好条規締結による朝鮮開国まで遡る。釜山、元山、仁川などの港湾地域から始まった居留地は徐々に内陸部にも広がりを見せ、最終的に在朝日本人の数は1945年の日本敗戦時には80万人近くにまで達していた。本発表では自身の研究テーマである在朝日本人史研究における個人史と地域史の観点から、慶尚北道達城郡に築造された寿城池という灌漑用の池に注目する。この池はこの地に移住した水崎林太郎という人物及び水崎と関連のあった朝鮮の人々によって、1924年から3年の歳月を費やして築造された池である。まず寿城池の築造過程を確認し、水崎そして関連する朝鮮の人々についても整理する。加えて現代における寿城池の表象についても検討する。

第 183 回

■日時 7月20日(木) 16:50~

■発表者 梶原悠(人文学研究科外国学専攻 博士前期課程1年)

■発表タイトル 「イタロ・カルヴィーノ「我々の祖先」三部作の位置づけについて」

■要旨 現代イタリアの作家イタロ・カルヴィーノは、多彩な作風で知られている。特に後半の実験的な手法の作品は世界的に読まれている。前半については、ネオレアリズモ作家として出

発し、後に一方ではリアリズム作品、他方では寓話作品を書いた。彼のリアリズム作品から後半の彼の特徴を見出す研究がなされている一方で、寓話作品、特に「我々の祖先」三部作と彼の後半の作品の特徴とのつながりについては、まだ論じる余地があるように思われる。そこで本発表では、前半のカルヴィーノが書いた主要な二つの評論から 1950 年代から 60 年代にかけての彼の問題意識を読みとり、それと「我々の祖先」三部作にどのようなつながりがあるかについて論じる。

第 184 回 (東南アジア学会関西例会 10 月例会との共催)

■日時 2023 年 10 月 14 日 (土) 13:30 ~

■発表者 1 渡辺彩加 (京都大学大学院総合生存学館 博士課程)

■発表タイトル 「移動後のカテゴリー変更の試みークーデター後にミャンマーからタイへ移動した人々に着目して(仮題)」

■要旨 本発表の目的は、クーデターを契機にミャンマーからタイへ移動した人々のカテゴリー変更の試みの実態を明らかにすると共に、移動後の生活に影響する要因は何かを明らかにすることである。難民条約では、迫害を受けるおそれがあり、国籍国の外にいる者で、国籍国から保護を受けられない者もしくは受けることを望まないものを難民と定義している。しかし、タイは難民条約に批准していないため、クーデター後に移動してきた人々が難民とは認定されにくい。一方でクーデター以前から国境の町ではミャンマーから移動してきた人々が生活しており、コミュニティが存在している。クーデター後に移動してきた人々は不法に国境を超えてきた場合が多く、不法移民としてみなされる。不法移民のカテゴリーから、身分証明書を獲得する試みや、難民として認定を受ける試みなどが行われる一方で、不法移民として逮捕、強制送還される人々も存在する。クーデター後にミャンマーからタイに移動した人々を対象に移動の経緯、移動後の生活に関して聞き取りを行った。その結果、移動前の職種、移動前のネットワーク、言語能力、所持金、移動後のコミュニティによって、受けられる支援やその後の生活に大きな影響を与えていることが明らかになった。

コメンテーター：和田理寛 (神田外語大学)

■発表者 2 中島咲寧 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程 2 年)

■発表タイトル 「インド洋海域世界からみた東南アジアのインド系社会ーマレーシアのタミル系ムスリム移民を事例としてー」

■要旨 本発表は、マレーシア在住のタミル系ムスリム住民を事例に、歴史世界としてのインド洋海域世界と、現代東南アジアにおけるインド系移民社会との連続性を明らかにする。当集団は、植民地化以前より交易を通じてマレー半島に流入し、その後定住化した南インド出身の商人にルーツを持つ。民族と宗教の分布が重なるマレーシアで、イスラームを信仰するマレー系社会、殆どがヒンドゥー教徒であるインド系社会の狭間に立つマイノリティの彼らは、周縁的な立場にある。一方その現状を見ると、親族規範や商習慣、宗教実践の場で集団独自の生活様式が維持され、移民社会の凝集性が保たれていることに気がつく。本発表ではその背景を、インド洋海域世界に蓄積された社会関係に着目して検討する。ペナン島での調査からは、男性親族のみから妻子帯同での移住に変化した時期が独立前後と比較的遅く、南インドの出身村落との間で親族関係などの紐帯が継続していることが判明した。また、故にマレーシア在住の親族や伝統的な商習慣・宗教実践の担い手の中に常に 1 人はインド国籍の移民一世が存在している状況があり、これらを通して、近代国家以前の海域ネットワークが国民国家制度の下で周縁化した移民社会の凝集性を支える基盤として機能する連続性の動態が明らかになった。こうした動態は個別の地域枠組みの分析では捉えづらく、本発表の内容は、それら個別地域を越えた海の視点からの分析の重要性を示唆するものでもある。

コメンテーター：長津一史 (東洋大学)

第 185 回

- 日時 10 月 12 日 (木) 16:50～
- 発表者 島村俊輔 (文学部西洋史学専修 4 年)
- 発表タイトル 「ジャワ防衛義勇軍の実態と独立への繋がり」

第 186 回

- 日時 11 月 9 日 (木) 16:50～
- 発表者 金東熙 (外国語学部 非常勤講師)
- 発表タイトル 「朝鮮総督府の旅券制度と発給政策」

第 187 回

- 日時 11 月 16 日 (木) 16:50～
- 発表者 國眼綾乃 (言語文化研究科言語社会専攻 博士前期課程 1 年)
- 発表タイトル 「先住民アエタと彼らを取り巻く社会の認識について」

第 188 回

- 日時 11 月 28 日 (火) 16:50～
- 発表者 呂佳豪 (人文学研究科外国学専攻 研究生)
- 発表タイトル 「ワ州におけるワ族の国家意識と民族意識のカタチー政治のジレンマと民族的経験について」

第 189 回

- 日時 11 月 30 日 (木) 16:50～
- 発表者 陳顔開 (人文学研究科外国学専攻 博士前期課程 1 年)
- 発表タイトル 「インドネシア在住華人に対する中国とインドネシアの見方とその変容」

第 190 回

- 日時 12 月 6 日 (木) 16:50～
- 発表者 島本昌典 (人文学研究科外国学専攻 博士後期課程 1 年)
- 発表タイトル 「1920 年代慶尚北道達成郡寿城池築造と水崎林太郎 ―水崎林太郎とその周辺人物を中心に―」
- 要旨 1927 年に完工する寿城池は、在朝日本人である水崎林太郎と、そのほか 4 名の朝鮮人によって計画が進められた。水崎を含む 5 名は、1923 年に慶尚北道達成郡寿城面において水利組合を創立し、池の築造を進めていく。今回の発表では、水崎個人の経歴に着目し、池の築造へと歩みを進めることになる足跡をたどっていく。あわせて、水崎と共に活動した朝鮮人にも光をあて、在朝日本人と現地朝鮮の人々との関係の一端を考察する。

第 191 回

- 日時 12 月 14 日 (木) 16:50～
- 発表者 朴苑善 (言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程 3 年)
- 発表タイトル 「タイ国内における若者タイヤイ移民の社会空間の形成」
- 要旨 タイヤイとはミャンマー・シャン州を中心に、中国雲南省西部、タイ国北部に分布する民族である。現在のタイ国北部にあたる地域への移住は近代以前から行われており、特に 1980 年代半ば以降は、ミャンマー国内の不安定な政治・経済状況から逃れるため、また、タイ国の経済成長に伴い国内の労働力需要が高まったこと受け、多くのタイヤイがタイ国内へ移り住んだ。そして、現在では多様な移住の背景を持つタイヤイ移民がタイ国内に居住している。本研究は、チェンマイ市内とバンコク都内に集まる若者タイヤイ移民を対象としたものであり、2022 年 8 月から 2023 年 9 月にかけて行ったフィールド調査で得られたデータをもとに、若者タイヤイ移民らがタイ国内で形成する社会空間について考察した。

第 192 回

■日時 12月21日(木) 16:50～

■発表者 朴苑善(言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程3年)

■発表タイトル 「若者タイヤイ移民の社会空間の形成からーチェンマイの都市性と『集うこと』について考える」

第 193 回

■日時 1月11日(木) 16:50～

■発表者 Chae Jisu (外国語学部インドネシア語専攻 3年)

■発表タイトル 「インドネシアの芸術家団体アート・コレクティブによる社会改善の影響」

第 194 回

■日時 1月18日(木) 16:50～

■発表者 菊池泰平(言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程3年)

■発表タイトル 「ミャンマーにおける『連邦』の創造ーシャンの自治論とビルマ・ナショナルイズムの相互作用に着目して(1937-1962)」

第 195 回

■日時 1月25日(木) 16:50～

■発表者 岡野翔太(レーザー科学研究所特任研究員・人文学研究科招へい研究員)

■発表タイトル 「横浜中華街の『台湾系華僑』ー『双十節』を祝っているのは誰か」

■要旨 これまで横浜中華街は、1949年以降、コミュニティ内部において「二つの中国」の争いが激しくなり、「中国系(大陸系)」と「台湾系」に分裂していると言われてきた。これは間違いではないものの、「台湾系華僑」と名指されうる人びとについては、「台湾」という一言があることによって、常に外から単層的な集団が想定されてきた。「中国系(大陸系)」も同様である。報告者はこれまでの研究で、横浜中華街が「中国系(大陸系)」と「台湾系」と分裂した過程には、1945-50年代、新たに横浜中華街に流入した人びとー旧満州国留学・中国東北部(旧満州国)出身で戦後台湾にわたりその後来日した外省人、日本人引揚者ーが中国国民党と中国共産党の影響を強く受けながらコミュニティに関わったことで引き起こされたことを明らかにした。本報告では、横浜中華街における「台湾系華僑」と彼らが執り行う双十節(中華民国建国記念日)の祝賀行事を取り上げる。双十節は現在、中華民国(台湾)のナショナルデーの位置づけで、台湾以外の国々では中華民国政府の在外公館と華僑団体がそれぞれ祝賀レセプションを開いている。横浜中華街の双十節祝賀行事は、中華民国の建国初期から営まれている。それは1949年の中華民国政府の台湾移転よりもはるか前のことである。本報告では、まず横浜中華街内部の「分裂」をめぐる日中台の各種報道・研究を整理する。そのうえで、報告者のこれまでの研究を踏まえつつ、双十節(中華民国建国記念日)の祝賀行事を通し、横浜中華街の「台湾系華僑」の存在が、戦後の日本においていかに「台湾」という一言でその多層性が秘匿されてきたのか、さらに中華民国の「台湾」移転とその後の民主化によって、横浜中華街の「台湾系華僑」がいかに「台湾」の影響を受けつつも、台湾とは異なる横浜の「中華民国」を生きているのかを描き出したい。

第 196 回(東南アジア学会関西例会1月例会との共催)

■日時 1月27日(土) 14:00～

■発表者 黄蘊(尚絅大学)

■発表タイトル 「ホーチミンの華人カトリックコミュニティー現代ベトナムにおける宗教とエスニシティへの一考察」

■要旨 ホーチミンにある華人カトリック教会として、伝統的な華人集住地区チョロンにある華人教会「聖方濟各堂」をはじめとして、三つの系列教会がある。これらの教会はいずれもそれぞれの地域に集住する華人カトリック信者向けの施設として建てられたもので、またどちらも1975年以後の華人信者の出国・減少、その代わりとしてのキン族信者の増加という変化を経験

してきている。しかし、ここ20年ほどの宗教・教育政策の変遷、社会環境の変化のなかで、最も信者数の多い「聖方濟各堂」の例のように、現在キン族神父中心の国際的なチャイニーズカトリック修道会と連携し、広東語のできるキン族神父の参入も得るかたちで、かつてから培われてきた華人カトリック・コミュニティの宗教文化が依然として維持されていることが観察される。本発表は華人教会「聖方濟各堂」をはじめとする華人教会の歴史的歩みを踏まえ、現在の教会の成り立ち方への検討を通して、現代ベトナムにおける宗教、エスニシティ、多民族社会の動態についての一考察を提示したい。

コメンテーター：下條尚志（神戸大学）